博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者　　福岡由仁郎
学位請求論文　ピエール・ブーレーズ論―セリー主義の美学

審査委員（主査）西永良成
（副査）松浦寿夫
小沼純一
水林章
亀山郁夫

《審査の結果》

フランス現代音楽の作曲家ピエール・ブーレーズの音楽理論と実践の形成過程を記述することにより、現代音楽の発展のダイナミックスを精緻に分析した本論文は、構成の面で若干問題を残すものの、我が国では初めての本格的なブーレーズ論であり、審査委員会は論文審査及び最終試験のいずれにおいても高く評価し、全員一致で申請者に博士（学術）の学位を授与することに賛同した。

《論文の概要》

福岡氏による論文『ピエール・ブーレーズ論―セリー主義の美学』は、現代フランスを代表する作曲家・指揮者ピエール・ブーレーズ（１９２５－ ）の音楽的実験と達成とを歴史的・技法的・思想的に考察し、記述しようとしたものであり、このような包括的な試みは我が国でおこなわれたことがないのはもとより、世界的に見ても希有なものに属する。

序と結論を別にすれば、本論文は３部から構成され、もっとも長大な力作である第一部「軌道」は、それぞれ順番に「徒弟時代」「トータル・セリアリズム」「ポスト・トータル・セリアリズム」「可能性のための音楽」「膨張する宇宙―マラルメの世界」「軋轢そして展望」「時間の文彩」「科学技術と音楽」と題される８章からなっている。記述は１９４０年代後半から開始されるブーレーズの

音楽理論及び作品創造の形成過程を１９８０年代前半にいたるまで詳細に跡づけ、自伝的かつ文化的背景をも考量しつつ時系列に沿って配置して、その音楽史的な位置づけをおこない、射程と意義を考察するかたちをとっている。ここでは、若きブーレーズが彼に先行した一二音技法の創始者シェーンベルク、その後継者たるベルク、ヴェ−ベルンにたいして定めた自己の位置、また直接影響を受けたメシアン、レイボヴィッツとの関係の推移、後年彼のライバルとなるシュトックハウゼン、ケージとの遭遇、交流、離反の諸相、また彼の音楽的実験の現場になる《ドメーヌ・ミュジカル》やポンピドー芸術文化センター及び現代音楽・音響研究所(IRCAM)の計画、実現、実践の具体的な詳細、あるいは１９６３年以降きわめて異彩を放つ指揮者としての才能の開花を見た演奏活動の特徴などが手際よく提示されている。また、以上の伝記的記述にくわえ、彼の代表作である《ストリュクテュールⅠ》《ポリフォニーX》《ピアノソナタⅢ》《プリ・スロン・プリ》《ドメーヌ》《エクラ》《リテュエル》《レポン》などの楽譜分析、楽器配置の構図や現代的な音響テクノロジーの手続きの説明をとおして音楽における偶然性の問題に真正面から取り組み、「セリー主義」と呼ばれる彼の音楽技法の確立と展開・発展の過程が跡づけられている。そしてこのさい、すぐれた音楽理論家でもある彼の主著『現代音楽を考える』『徒弟の覚え書き』『参照点』『標柱−現代音楽の道しるべ』などのほか、様々雑誌論文などにも丹念な目配りがなされ、特徴的なテクストが引用されている。

続く第Ⅱ部「トータル・セリアリズム」は２章から成り、それぞれ「《ストリュクテュール 1a》」「《主のない槌》」と題されている。前者はブーレーズのセリー主義のもっとも顕著な作品であり、後者は詩人ルネ・シャールの同名の詩に触発されて、セリー主義に新たな展開をもたらした作品であるが、ここでは前者についてその技法を音高と音価の２種類のセリーの配置の配置、展開から全体構造まで音楽技法的に精緻に分析・記述され、後者についてはとりわけ和音構造とリズム構造の組み合わせによる基本セリーと派生セリーの連関と調和が理論的に解明されている。そして「セリー概念の哲学的分析」および「不連続と知覚」の２章から構成される第Ⅲ部「セリー主義の美学」はブーレーズのセリー主義の美学をジル・ドゥルーズの「リゾーム」的哲学とを対比的に論じ、この両者には通底するところがあるばかりか、この両者に交差する問いは芸術における現代性を考えるうえで、きわめて示唆するところが多いと述べる。

《審査の概要》

本学位論文の審査は本年９月２１日の書類審査を経て、１０月２２日に最終審査がおこなわれた。審査員から提出された批判・評価は概略次の通りである。

・評価すべき点

１）本論文はブーレーズの全体像が見えにくい現在の我が国においては必要であり、その啓蒙性において有意義な指標を提示するものである。

２）本論文で詳述されている「セリー主義」に基づくブーレーズの音楽哲学は、たとえばロシアのアバンギャルド芸術を考察する際にも、参照すべき基準を示すに十分なものであり、示唆するところが大きい。

３）本論文によりブーレーズの音楽美学をドゥルーズの哲学と比較することの正当性と根拠が示されたことは評価に値し、論者の今後の研究の豊かな発展性を予想させるに足るものである。

・批判されるべき点

１）構成に問題があり、圧倒的な量を占める第Ⅰ部と比較的短い第Ⅱ部及び第Ⅲ部との関連が明確でなく、いかにもアンバランスな印象が拭えない。

２）本論文の啓蒙的な長所と裏腹な関係であるが、その網羅性のゆえに記述に折衷性が散見されて論文としての純度が損なわれるだけでなく、議論・叙述が深み、広がりを欠く憾みが残る。たとえばブーレーズが何故にセリー主義に向かったのか、またブーレーズにおける作曲家と指揮者の共存・関連はもっと深く考察されてしかるべきではなかったか。また、仮に本論文がある種の啓蒙性をも内包しているとするなら、ブーレーズ及び彼が育った現代音楽の環境をもっと広く西洋音楽史のなかにわかりやすく位置づけ、説明する必要があったのではないか。

３）本論文の文章は難解であり、たとえば第Ⅱ部などは読む者の理解を拒んでいる感さえある。はたして論者はどのような読者を想定してこの論文を書いたのか。

以上の評価すべき点および批判されるべき点について、学位申請者に補足的な説明をうけ、審査員が審議した結果、音楽学も音楽美学の講座もない本学に

おいて、ほとんど独学のようにして膨大な資料を読みこなす専門研究をおこない、我が国のみならず、西欧のすぐれたブーレーズ研究者たちとも緊密な連絡をとるなどして、申請者の達成した成果は並々ならぬものであり、やはり最大限に評価されるべきものに相違ないがゆえに、博士（学術）の学位に値するのみならず、福岡氏の今後の研究の将来性について大いに期待が抱けるという認識でも委員会は一致した。